

ソ連農業についての近刊書

丸 毛 忍

わが国におけるソ連農業の研究は永い間殆ど禁止に近い閉鎖的な状態におかれていたにも拘らず、戦後、村を訪ねて出会う農民諸氏がコルホーズの名を知っておられ、これについて様々の關心を示されるのには驚く。農民のこうした關心の持ち方には流行を追う農業ジャーナリズムやシベリヤから歸還した人達の彼での見聞の影響も大きいであろうが、戦後の諸激動を體驗しつつある農民自身の苦惱がそこに現われているように思われる。戦後漸く自由になったソ連農業の研究は未だかかる農民の要望にいかほども答えてはいないが、パンフレットの解説書の域を脱した、夫々の特徴を持つ次の三冊の書物を世に送った。これらはわが国におけるソ連農業研究の水準を示すものと云えよう。

的場徳造著『コルホーズの話』二七二頁、昭和廿三年四月刊行、八雲書店

古賀英正著『ソヴェート農業經濟論』二五四頁、昭和廿四年一月刊行、同友社

書 評

ラヂェンスキー著・那須皓譯編『ソ聯農業の社會化』一九二頁、昭和廿五年二月刊行、岩波書店

以下、この三冊の書物を比較しながら、若干の問題點について批判的感想を記してみよう。

先ず著書の構成や取扱われている年代についてみると、『コルホーズの話』はソ連農業の自然的概観と農地改革の歴史についての章を前置として、コルホーズの經營組織（アルテリの制度、労働の組織と計算、分配等）と技術（耕地整理、輪作、機械化、試驗等）に關する章が中核となり、更に進んだコルホーズの實例、農民の生活や文化の問題にまで及んでいる。年代は主として農業の集團化が完成しコルホーズが經營として安定した三〇年代の後半期が選ばれている。

『ソヴェート農業經濟論』は序説でソ連農業の社會主義的性格の若干に觸れ、第一章では農業集團化の過程を述べ、第二章ではアルテリ定款を解説し、第三章ではコルホーズの生産や收支の状態、農民の所得等について可成り多數の數字を引用している。第二章、第三章の記述のために選ばれている年代は『コルホーズの話』に同じく三〇年代の後半期である。

『ソ聯農業の社會化』は、第一篇で十月革命直後から全面的集團化の完了期に至るまでのコルホーズの發展を詳細に跡づけ、増補の部分では今次戦争後のコルホーズおよびMTSの状態を分析し、第二篇ではわが國に殆どその研究のみられないソフホーズについて、その發生から今次大戦後に至る發展の跡を論述してい

る。本書の特徴はこのような歴史的實證的な研究にあるのだが、本書の第一篇に當るラデジンスキー氏の論文が一九三四年に執筆されているにもかかわらず、増補としてヴォリン、ヤスニー兩氏の論文によつて譯者の執筆されたものが主として戦争直後の四六、七年を取り扱つてゐるため、第一篇と増補との間にホルホーヅが安定し着實な發展を遂げつゝあつた三〇年代後半期とドイツ軍の占領により莫大な損害を蒙つた今次大戦期の農業についての約一〇年のブランクがあり、論述が、農業の集團化が完了したばかりで未だ混亂動搖を免れなかつた時期からいきなり戦争の痛手を脱しない四六、四七年の時期へ移つてゐることは、讀者にソ連農業について誤つた評價を下さしめる恐れがある。第二篇についてもほぼ同様のことがいわれよう。ソ連のように短期間に急激な變化を経験した國の農業は、その研究が取扱う年代によつて全く別個の印象を與えることに注意されねばならない。

資料についていえば、『ホルホーヅの話』『ソ連農業の社會化』はソ連文献の豊富かつ嚴密な検討の上に築かれた研究である。但し前者はその啓蒙書としての性質上文献の出所は示されておらない。『ソヴェート農業經濟論』は原資料には殆ど當つていないが、今日入手が可能な限りでの邦文資料がよく驅使されており、また若干の外國研究者のソ連農業についての見解がとりいれられてゐる。

註 「ソ聯農業の社會化」は次の諸論文の翻譯からなつてゐる。

Wolf Ladejinsky, Collectivization of Agriculture in the Soviet Union, 1 & 11. (Political Science Quarterly, Vol. 49, No. 1 & No. 11, 1934)
Wolf Ladejinsky, Soviet State Farm (Political Science Quarterly Vol. 53, No. 1 & No. 11, 1939)
なお増補分の参考文献は次の通りである。

Lazar Volin, The Kolchaz in the Soviet Union (Foreign Agriculture, Vol. 11, Nos. 11-12, 1947)
Lazar Volin, Machine Tractor Station (Foreign Agriculture Vol. 12, No. 4, 1948)
Naum Jasny, The Plight of the Collective Farms (Journal of Farm Economics Vol. 30, No. 2, 1948)

II

三冊の書物における著者達の態度なり方法はもちろん夫々に異なるが、いずれもソ連農業をできるだけ實證的客觀的に取扱おうと努めてゐることは、とかく陳腐な政治的イデオロギー的評價の介入し易いこの種の書物として首肯出来る態度である。

『ホルホーヅの話』の著者の場徳造氏は「十餘年にわたりソ連邦の農業について研究する機会を持つことが出来た」(『ホルホーヅの話』序文)ほとんど唯一の人であり、短期間ながらソ連にも二回ばかり旅行してゐられる。氏は多年の着實な研究の結論としてホルホーヅに農業進歩の理想を見出され、わが國とソ連との段

階の相違を認めつつ、「しかも尙コルホーズが新しい社會組織のもとでの協同經營の新しい形態であり、今日向上と發展を新しい社會の確立に求めているわが國の自覺した進歩的農民諸氏を激勵し、よき模範と目的を與えるに違ひない」(前掲書序文)ことを確信し、本書ではわが國の農民に「よき模範と目的を與える」ために、コルホーズが資本主義國の農業經營に較べて優れているゆえんを、コルホーズの經營組織と技術の側面を通じてできるだけ具體的に、農民の納得し得る姿で説明しようと試みていられる。本書は農民の啓蒙を目的とする關係上極めて平易な言葉で語られているが、著者のソ連農業についての多方面にわたる豊かな研究によつて裏づけられており、戦後派研究家の及び難い説得力を有している。本書はコルホーズの經營組織についての研究乃至解説書としてはすぐれた明快さを持つ。だが啓蒙書として執筆された關係から一應筆者の意圖外にあつたことかも知れないが、經營の會計的側面、その國民經濟との連關の側面の研究は手薄で、コルホーズの經營の研究としては今後補足されるべき部分をもつている。古賀英正氏については「ソヴェート農業經濟論」が中央大學での講義に補筆されたものであると云う以外に何も知らないが、序文で「この小著は集團農業の宣傳の書でもないし、呪咀の書でもない。乏しいながら入手し得られるかぎりの資料で客觀的に集團農業を紹介したものである。著者にとつては現にこのような形態の農業が世界の龐大な部分に嚴然として存在することそれ自體が極めて興味あることであり、……」と述べていられる通り、古賀

氏はソ連農業に對する自己の意見や判斷の提出を差し控え、主として資料に語らせる方法を探つておられる。古賀氏の立場は的場氏とラデヂンスキー氏やヤスニー氏の中間にある。古賀氏はソ連農業の缺陷や弱點をも可成り自由に指摘しておられるが、同氏の客觀的紹介の態度はソ連農業に對して概ね肯定的であつて、次の言葉は氏のかかる立場を最も明かに示すものであらう。「我々はソヴェート農業をもう少し永い眼で見守らなければならない。少なくとも現在のコルホーズを批判するに當つては、極めて短い期間に、しかもその初期に於ては戦争と内亂からの回復と云う困難な仕事を完遂し、その後期においては對獨戰爭を勝利に迄戦ひ抜くと云う死活的な闘争をなしつつ、凡ゆる惡條件の下にそれが如何なる成果を擧げてきたかをみなければならぬのである。缺陷や弊害は無數にあるであらう。それは率直に認めねばならない。だがそれらの現在の弱點、不合理の凡てにも拘らず、もし全體としてそれが光明ある將來に向つていっているものであるということが斷言できるならば判決は必ずしも一見した如く不利なものではないであらう。」(「ソヴェート農業經濟論」二二七、二二八頁)。本書はかかる態度でソ連農業の主要問題を殆んど網羅的に取り扱ひ、概説的なソ連農業經濟論として極めて要領よくまとめられているが、そこに本書の弱點と長所が同時に見出される。那須皓氏は「ソ聯農業の社會化」の譯者序文のなかで、最近のわが國における農業機械化論、協同化論が「結局はソ連における集團農場の形態への近接移行を夢みる」ものとなし、「事の採否

は單な抽象的理念によつて決せらるべきではなくして、具體的妥當性如何によつて決せられなければならぬ」が、ソ連農業について「實際の内情なり成績なりを詳細に論述せるもの」が極めて乏しいので、この缺を補うため本書の譯述を企てたと述べておられる。われわれは那須皓氏のような老大家が敢えて文獻翻譯の勞をとられたことについて敬意を表したい。氏はさらに序文において「本書の論述は公正且つ客觀的であるから如何なる思想的立場にある人にとつても熟讀せらるべき價值ありと信ずる」と述べておられるが、この評價はラデデンスキー氏の論文については極めて適切であるが、ヴォリン、ヤスニー兩氏の論文に基いて那須皓氏の補筆された部分については必ずしも妥當するとは云い切れないように思う。

ラデデンスキー氏は米國農務省に奉職される農業經濟學者であり、嘗て總司令部の天然資源局にも在勤され、わが農業總合研究所を訪問されたこともある。氏は姓やロシア語についての知識からしてスラブ系の人らしく想像される。ヴォリン、ヤスニー兩氏は今次大戰中から特に盛んになった米國におけるソ連研究の新進のエキスパートであり、ヴォリン氏は農務省に勤務され、またヤスニー氏はスタンフォード大學のM・K・ベネット教授の下で研究する傍ら農務省とも關係をもたれ、後者のソ連の農業および統計についての研究はわが國にも二、三紹介されている。

註 Naum Iasny は主著 *The Socialised Agriculture of the U.S.S.R.* 837 p. 1949 の外にソ連農業に關するの數多く

の論文があり、また彼の *Intricacies of Russian Income Index*, *The Journal of Political Economy* は大藏省調査月報三七卷四號に邦譯されている。

本書によれば、ラデデンスキー氏とヤスニー氏、或はヴォリン氏のソ連農業についての態度なり見解なりは必ずしも一致しないようである。それには各々の論文の書かれた年代の相違をも考慮しなくてはならないが、ラデデンスキー氏が客觀的に事實を跡づけると云う態度に終始していられるのに對し、殊にヤスニー氏は可成り積極的な判斷や批判を展開される。たとえば、ラデデンスキー氏が一九三四年「農民の需要のより多くがかくして充たされ（安價な消費財の増産により）引用者」、勞働意欲が刺戟されるならば農民は益々大なる努力を致すべきことが期待される。併しかかる努力への刺戟が充分存在する時期が来る迄は、ロシアの條件下では農業集團組織が個人主義的組織に優れる程度を適當に判定することは時期尚早である。（『ソ聯農業の社會化』九〇頁）と述べているのに反し、那須氏補筆部分ではソ連の農民は國家に搾取されているので、農民の需要をより多く充足し、彼等の勞働意欲を刺戟する可能性に乏しく、コルホーズ、ソフホーズは「經濟原則と人間性に背く制度」（前掲書一〇一頁）であつて、殆どあらゆる點で個人農場に及ばないことが些か性急に斷定されている。すなわちラデデンスキー氏がコルホーズの優劣を判定する前提となしている「農民の需要のより多くが充たされ、勞働意欲が刺戟される」ような條件は、未だ實現されていないと云うより、コルホー

ズ農業の下では到底實現され得ないものとみられている。條件の成熟をまたがずして「事の探否」は既に決せられているかの如くである。だからラデチンスキー氏の研究のその後の發展が補筆部分にみるような結論に到達したと解するには若干の無理があり、兩者はむしろ別個の論文として讀まれた方が誤解が少いと思う。

なおアメリカのソ連研究家の多くは、例えばコルホーズ農業を論ずるにしても、社會主義と資本主義の體制上の相違を殆ど無視し、單にコルホーズ農業における勞働生産性乃至農民の所得といった觀點からのみ問題を取りあげ、或は資本主義國の農業と比較する傾向が強く、その限りではすぐれた分析を行つて示唆を與えてくれるが、體制上の差異を全く看過する場合、殊に將來の豫測について誤謬を犯す危険が大きいと思う。この意味からもヤスニー氏、ヴォリン氏と的場氏や古賀氏の見解は對立的なものとなる。

三

ソ連農業の把握をよりの確ならしめるためには、その前提として、コルホーズ農業成立前の農業の自然的經營の諸條件の特徴づけと社會主義經濟についての本質的理解が必要である。

ソ連農業の自然的諸條件については「コルホーズの話」が簡単に觸れているのみである。

舊ロシアの農業における資本主義發展の具體的様相——例えば土地所有の諸形態、經營の規模別分布と資本蓄積、雇傭勞力の状態——およびこれらが十月革命の土地改革とプロレタリア獨裁の

政策によつていかに變化したかを特徴づけることは、ソ連におけるコルホーズ化の諸條件とその具體的過程の分析にとつて不可缺の前提である。舊ロシアの農業については主として土地改革についての觀點からの場、古賀兩氏が論及しているが、舊ロシア農業の特徴を鋭く擷んだものではない。ラデチンスキー氏は革命後における各々のタイプの農業經營の消長とそれらの内容を分析し、初期のコルホーズが近代農業の適用に充分な土地をもたず（ソ聯農業の社會化）（三頁）、耕地一ヘクタール當りの生産手段ではむしろ個人農場に劣り（前掲書一四頁）、従つて「集團農場におけるヘクタール當り收量は優良なる個人農民經營の收量には尙可なり劣るが、普通の個人農民經營の平均に較べると上位にある」（前掲書一七頁）ことを明らかにしている。古賀氏の論述は經營問題には殆ど觸れていない。

註 的場德造氏にはその後次の諸研究がある。

『一九一七年十月前後に於けるロシア農業の諸問題』（農業總合研究）第三卷第二號）

『ソ連中央アジア灌漑農業地方における土地改革』（農業總合研究）第四卷臨時増刊號）

社會主義經濟についての本質的理解の如何はむしろ行論の背後にある著者達の問題意識の問題であらう。換言すれば、社會主義經濟の獨自なメカニズムと農業の國民經濟的地位が常に明確に意識されつつ、農業問題が取扱われているか否かと云う問題であらう。この點については、ソ連研究にともなう獨自の困難さはあ

るとしても、いずれの著書もお充分ではなく、經濟學的分析に若干の物足りなさを感じしめる。またヤスニー氏の場合にはしばしば社會主義經濟に對するあまりにも獨斷的な理解が見出される。

「十月の革命的諸變革に匹敵する意義を持つ」といわれ、ソ連農業に社會主義的生産諸關係を確立した農業の全面的集團化を三冊の書物は夫々にどうみているであらうか。「コルホーズの話」はこの問題には殆ど闕説しておらない。「ソヴェート農業經濟論」と「ソ聯農業の社會化」とはほぼ同一の事實を記述しながら、その見方はかなり異つてゐる。後者の方がもちろんより詳細且つ具體的であることはいふまでもないが。

農業では大經營による小經營の排除が徹底的に行なわれず、多數の小農經營が維持される結果、機械の使用もまた相對的に立遅れてゐる。従つてプロレタリア政權の樹立と同時に、工業のようにこれを直ちに國營企業（農業の場合にはソフホーズ）に組織することは出来ない。農業にはこれを直ちに社會主義化するための既成の社會經濟的基礎——機械化大經營が存しないので、政權樹立後一定の準備期間を経て、富農を絶滅し、小農の耕地や家畜その他の生産手段を大經營——コルホーズに集中するという革命的手段を改めて採らねばならぬ。かかる農業の集團化を可能ならしめるものは、土地國有化と絶對地代の廢棄、ならびにプロレタリア國家による巨額の農業投資——機械導入に外ならないのである。

小農經營を集團化する問題は既にエンゲルスによつて提起せられてゐる。彼は云う、「小農に對するわれわれの任務は、何よりも

先ず、暴力を持つてではなしに、實例とこの目的のための社會的援助との提供によつて、彼の私的經營および私有所有を、一の協同組合的なものに導き入れることにある」（『フランスおよびドイツにおける農民問題』改造社版マル・エン全集第十三卷五〇二頁）と。その後カウツキーおよびレーニン、就中、後者の「協同組合論」において問題は更に具體的に發展せしめられており、ソ連の場合小農經營が集團化される方向は理論的には一應明らかであつた。しかしソ連において農業の集團化を何時いかなる規模と速度で實施するかは實踐的に解決されねばならぬ問題であつた。それは別の言葉でいえば、當面の農業政策の主方向を富農的・資本主義的大經營の發展に置くか、社會主義的大經營の發展に置くかと云う問題でもあり、一國における社會主義建設が可能か否かというロシア革命の根本性格にかかわる問題でもあつた。激烈な論争の結果、農業の富農的發展、一國社會主義建設不可能を主張した人々は人民の敵として肅正され、結局スターリンの農業集團化政策が勝利を得た。

一九二九年に農業の全面的集團化に着手せねばならなかつた最大の理由は次の通りである。

(一) 一國社會主義建設の必要から、第一次五カ年計畫の工業發展テンポが異常に高く決定されたので、この目標達成のために、農業は從來より遙かに多量の食糧と原料および勞働力を工業に提供し、またより多量の農産物を機械輸入の見返りとして輸出に振り向けることが要請された。

(二) 農業自體は土地改革によつて經營が零細化し、穀物の市場出廻り量は半分に減じていて、現状のままでは工業の要請に答へることは不可能であつた。また農業部面では小商品生産が支配的である限り、絶えず生み出される資本主義的要素のため、都市の工場労働者と農民の提携はかき亂され、農業における生産力の急速な向上、社會主義的發展は所期し難かつた。

このように農業の全面的集團化を必然ならしめる要因は農業、工業の双方にあり、輸入機械に基づく生産財生産部門、就中、農業機械製作の端緒的確立と同時にそれは強行せられたのである。

古賀氏は上記の論争にも頁を割いていられないわけではないが、一九二九年における全面的集團化實施の理由として、穀物の市場出廻り量が半減したため、「このような状態が續くならば、赤軍および都市労働者は慢性的飢饉に當面していなければならぬ」(『ソヴェート農業經濟論』五二頁) 點を挙げられるのみである。

ラデデンスキー氏は上記の論争には殆ど觸れられるところがない。従つて氏は集團化の過程を分析して、工業化計畫の目的達成のために急速な集團化が必然的であつたことを認められるが、農業集團化の問題が一國社會主義建設と云ふ觀點から把握されていないので、何故そのような工業化計畫が設定されねばならないかには答へられず、集團化の必然性自體も若干曖昧となるのを免れない。氏の集團化過程についてのすぐれた事實の追跡は國民經濟的觀點からの把握をより明確にされたならば理論的に一層すすき

りしたものとなり得たであらう。

古賀氏もラデデンスキー氏もともあれ一九二九年の農業の全面的集團化の必然性を承認されたが、集團化の方法について、古賀氏は「……農民は何等かの解決策、よりよい生活への途を、小經營の結合體の中に、即ちコルホーズへ加入することの中に、見出し得るのではなからうかと考え始めた」(前掲書五六頁) という風に農民の自發的參加の面を強調されるが、ラデデンスキー氏は、コルホーズに與えられた特典は中農にとつて格別魅力的なものでなく、「彼等がそれに參加するに至つたのは、經濟力の壓迫と並びに、あとで判然承認された如く、純然たる行政的手段の壓迫によるものであつた」(『ソ聯農業の社會化』三〇頁) と指摘している。ともあれ中農が參加しなければ農業の全面的な集團化は成立しないわけだ。兩者の見解の差異は、集團化の進行にともなつて起つた諸問題すなわちコルホーズ化のテンポの一時的逆轉、多數農民の脱退、農民による家畜の大量屠殺、トラクターや専門家の不足、生産乃至供出の不振、MTSの政治部設置等についても現われ、古賀氏はこの原因を地方行政當局や一部黨員の集團化について採用した方法の拙劣や富農の反抗に求められ、一方ラデデンスキー氏はこれらの點を認められないわけではないが、寧ろ集團化のための條件が充分具備しないにもかかわらず、これが強行されたことからくる混亂を主たる原因とみていられる。

この全面的集團化運動についてのソ連側の公式見解は「それは富農への讎罵に反對して自由なるコルホーズ生活のために闘いつ

つあつた數百萬農民大衆の下からの直接的な支持を受け、國家權力の提唱によつて上から行われた」(『全聯邦共產黨小史』田岡信太郎譯四二五頁)と極めて含みの多い表現を用いているが、コルホーズが中農に經濟的利益を與えない限り——當時のソ連にはかかる條件は未だ存在しなかつた——彼等の大多數がコルホーズに自發的に参加することは望み難く、従つて自由市場に壓迫を加えて中農の經濟的基礎を覆し、且つ上からの種々なる行政的措置を必要としたのは當然であらう。

西歐の學者や社會主義者はコルホーズ運動が條件の缺除にも拘わらず、強制的手段によつて行われた點を批判してきた。例えばカウツキーは一九三一年にこう書いている。「ロシヤのコルホーズが實際にやり初められたのは、私が嘗て展開した意見が用いられたのだということ、誠にその通りである」が、「大規模農業が小農耕作に優れているものならば是非具備していなければならぬところのすべての諸條件の内、唯の一つでもロシヤには存在していないものはない」、「もしも農業生産の過程を少しでも混亂させたくないとなれば、小規模生産から大規模生産への轉換は、急進的でなく漸進的でなければならぬ」(カウツキー「五ヶ年計畫立往生」(Bolshevism at a dead-lock) 小池四郎譯三五—三六頁、五五頁、七八頁)。まさにその通りではあるが、かの「農業問題」の著者はラヂンスキー氏ほどにもソ連の「一國社會主義建設の立場を理解しておらないと云う外はない」。

四

コルホーズの農業經營の獨自な性格、およびコルホーズの確立にともない農業における労働生産性と農民の所得がどう變つたかが、三冊の書物にいかになつて現われているかを見よう。

カウツキーは大經營の小經營に對する利益について「耕作面積の損失の減少、生きた及び死んだ備品の節約、備品の完全な利用、小經營には不可能なる機械使用の可能、分業、科學的訓練ある指導、商業的優越、容易なる資金調達」(カウツキー「農業問題」譯本岩波文庫版上卷一八三頁)等の諸點を擧げている。コルホーズは社會主義的大經營であるから小經營に比較して當然カウツキーの指摘するような利益を享受すると同時に、資本主義大經營と較べて次のような原則的優位性をもたねばならぬわけだ。

ソ連では土地の私有廢止、國有化が實施されているので、土地の集積・集中に對する社會的な障害がなく、コルホーズは小農經營の協同化集團化を通じて形成され、小農經營は完全に一掃される。またコルホーズでは不拂労働の占有が存しないので、剩餘生産物のより大きな部分が經營の改善、擴大再生産に向けられる。しかも個々のコルホーズにおける蓄積をまつまでもなく、プロレタリア國家を通じて大量の農業投資がなされ、技術の急速な進歩が可能である。その際機械の導入によつて労働者は排除されることなく、農業の一層の集約化と多角化およびこれに基く工業の發展によつて新しい雇傭が常に創り出される。コルホーズの農産物の販路は計畫によつて保證されている。

ソ連農業を正しく理解するには、コルホーズの社會主義的大經

營としての原則的優位と、それがソ連においてどの程度實現されているかを明らかにしなくてはならない。「コルホーズの話」は、先にも述べたように組織的技術的側面からこれを試みているが、上記の諸原則がどの程度實現されているかについての數量的檢證に乏しい。「ソヴェート農業經濟論」はコルホーズの原則的優位を容認する見解を斷片的ながら處々に示し、多くの統計數字を引用するが、そのための分析は殆どなされてない。「ソ聯農業の社會化」はコルホーズの社會主義的大經營としての諸特徴を明らかにすると云うより、資本主義諸國の農業經營との同一平面においてコルホーズの經濟性を明らかにすることを問題としている。

コルホーズの經營的分析を行うには、前提として社會主義經濟のメハニズム、すなわち社會主義經濟の諸法則がいかなる諸手段を通じて現實に數量化されて行くかという過程についての充分な理解が必要であるが、著者達のかかる前提についての準備は夫々の立場において必ずしも充分とは云い難く、その結果はコルホーズの會計的な側面が閉却され、或は不充分にしか分析されてないことにも現われているように思ふ。

コルホーズは獨立の採算單位であるが、コルホーズの會計は、工業の國營企業やソフホーズの獨立採算制（カペラゴット）に比較して、今日のアルテリ段階を反映する極めて複雑なメハニズムを有している。このメハニズムの特徴は主として次の諸點にある。

第一に、コルホーズは國營企業たるMTSのトラクター、コンバインのサービスを受けるが、これはコルホーズの使用する生産

用固定フォンドの七九・二%（一九三七年）に當つている。國家はMTSを通じてコルホーズに大量の生産手段と勞働を投下し、かかる國家の支出もまた當然にコルホーズの生産物の價值の中に對象化される。だからこの國家の支出はMTSの参加によつて生産されたコルホーズ生産物の價值のうちから補填されなくてはならぬ。すなわちコルホーズはこれに對してサービスを受けた面積と收量に應じて現物をMTSに支拂ふ。この現物支拂分は穀物生産高の一五・一八%に及ぶ（「コルホーズの話」一五八頁）が、これが生産費の構成において占める經濟的な大きさ、換言すれば機械化の適用を擱むことは容易でない。

なおMTSは現物を義務納入價格で調達機關に引渡すが、MTSは獨立採算制をとつていないので、引渡しから生ずる收入によつてMTSが貨銀の支拂や機械の銷却を行い、經營を維持出来るかどうかは判明しない。

第二に、コルホーズの生産物がどう分配されるかについての原則と夫々の部分の割合は大體判明しているが、農産物の價格體系は頗る複雑で、義務納入價格、豫約買付價格等の如き各種の國定價格とコルホーズ市場價格の如き自由價格とが併立しており、且つこれらの價格と生産費の關係は明確でない。

コルホーズ農民への分配は現物と現金の双方からなっており、價格機構が複雑なために評價が難かしい。

第三に、アルテリでは農民が若干の生産手段と私經營を持ち、その生産物をコルホーズ市場で自由販賣することが許されている。

かかる副業經營の生産物は農民の自家消費および現金収入においてかなり重要な位置を占める。このことはコルホーズの收支の均衡が副業經營の許容に基いてのみ成立するのではないかとの疑問を生ぜしめる。

かかる事情はソ連當局が農産物の價格と生産費について充分な資料を發表しないこととあいまつて、コルホーズの經營的分析を困難ならしめている。ここから例えば次のような見解が生ずる。

「集團農場なれば其の能率に於て敢て國營農場に優らずとしても、その缺損は國家が負い込まずして之を組合員に負擔せしめることが出来る」「ソ連農業の社會化」一〇〇頁、「農場加入農民は集團農場に對して殆ど全資本を投入し、又必要勞働力を提供すべき義務を荷うのであるが、農場生産物によりて其の生活を支持すべき保證は何等與えられていない。否、屢々農民は自家用菜園なり個人保有を許された家畜などにより辛じて生活しなければならぬのである。集團農場の生産物は都市住民のため、工業のため、輸出のために供せられることが先決問題なのである」(前掲書一二〇頁)

主としてヤスニーのものと思われる以上の見解は、從來からソ連農業に對する有力な見方として存在していたものの一種である。それは解り易く云えば次のようにならう。コルホーズは低廉な國定價格で大量の生産物を供出しなくてはならないので、農民の勞働日に應じて分配される部分は不當に少なく、且つ不安定である。従つて農民は副業經營からの収入に依存せねば生活を維持

することが出来ない。これは工業の發展のために農民が國家によつて擧取されていることを意味する。そしてこのためには、收入にかかわりなく勞働者に一定の賃銀を支拂わねばならないソフホーズよりも、收入の減少を分配の減少と云う形で直ちに農民の肩に轉嫁し得ると同時に、副業經營が生活切下げに對する緩衝器の役割を果たすコルホーズの方がより好都合である。かかる制度の下では農民の勞働への刺激が乏しく、勞働生産性の向上は遅々たるを免れない。

コルホーズの會計面を分析しなくては、ソ連農業に對する明確な評價を與えることは不可能であるが、コルホーズが經營として向上しつづめるか或はその逆であるかは、コルホーズの不可分基金(蓄積)と農民への分配分が増加しているか、またその裏づけとして農業における勞働生産性が増加しているかどうかをみれば、その大體の方向ぐらひは察知され得るであらう。この點についても確かな判斷を下すに足る資料は提供されていないが、不可分基金のコルホーズの現金分配中に占める比重は一九三七年の一二・四%から三八年には一四・五%に増加し(『ソヴェート農業經濟論』一二七頁)、一應の上昇傾向を示唆している。また勞働日に對する現物および現金の分配は一農家當りでは一九三二年の穀物六〇〇疋、現金一〇八ルーブルから一九三七年には穀物一、七四〇疋、現金三七六ルーブルに増加したが、『コルホーズの話』九八頁、これは主として勞働日數の増加によるものであつて、一勞働日當りに換算すると一九三二年から三九年までの期間には豐作

であつた三七年を除けば必ずしも増大傾向にあるとは云い切れない(「ソ連農業の社會化」一四頁第三六表參照)。但し勞働日の増加は一般的には農業の季節性の克服、その集約化多角化の方向を示すものと云われよう。また巨額の不可分資金を蓄積し、農民に對して豊富な分配を實施している百萬長者^{ミリヤン・シズナヤ}コルホーズも既に數千に上ると云われ、「コルホーズの話」はその二つの例を紹介している——これらのコルホーズでは畜産、果樹、園藝等の生産の比重が大きいと云う以外に、かかる經營成立の條件は明らかにされてないが、なお農民に對する直接の分配以外にコルホーズの提供する社會施設の利用を考慮する必要があり、その點ではコルホーズは明らかに進歩を示している。

農民が工業發展のために搾取されているかどうかという問題は、MTSを通ずる國家投資(農業機械の提供)、農産物の供出或いは販賣量と價格、輕工業製品の供給量と價格との間の相互關係を明らかにしなくては、ヤスニー氏の如く簡單には斷定し難い。またこれらの關係が今日農民にとつて假りに不利であつても、社會主義工業の發展が近い將來これらの關係をどう變化するかを考慮にいれなくては公平な判斷とはいえないであらう。

ソ連の穀物生産高は戰前數カ年の平均をとると一九一三年に比し三割内外の増加を示しており、その間農業人口は若干減少したので、一人當りの年生産高にみられる勞働生産性は確實に上昇し、穀物の商品化率は二六%から四〇%に増大した。しかしかかる穀物生産高の増加は主として播種面積の擴張(約三割)による

もので、單位面積當りの收量増加による部分は少なかつた。従つて勞働生産性の向上は單位時間當りについみればほど割引して考へなくてはならない。これは一勞働日當りの分配があまり増加していないことと符合している。これらの點について「コルホーズの話」や「ソヴエト農業經濟論」は異常な豐作であつた一九三七年を基準に種々の比較を行つていたので、大體の傾向は示し得ても、若干過大評價に陥る恐れなしとしない。しかしヤスニー氏の如く「勞働時間を單位として吟味すると、集團農場における勞働の生産性は以前の個人農場の平均とほぼ等しいか、或いは多少それより低い位だ」(「ソ連農業の社會化」一二六頁)という點のみを強調し、コルホーズが大量の商品穀物と勞働力を工業に提供し得た事實の國民經濟的な意味をみないことは、逆にソ連農業を過少評價するものといわねばならぬ。コルホーズは今後經營を集約化・多角化することによつてヘクタール當り生産量を増大する可能性を持つており、今次大戰後の畜産振興三カ年計畫、ミチュリン・ルイセンコ農學の應用、牧草輪作法の導入、スターリン自然改造計畫(植林・灌排水施設等)等にみられる諸施策はかかる發展の方向を示すものである。

「ソ連農業の社會化」は特に一節を設けて米ソ兩國農業の勞働能率の比較を行つてゐるが、これは社會主義人經營の原則的優位がソ連でどの程度まで實現されているかとみる指標として興味深い。そこでは勞働日の密度、ヘクタール當り所要勞働時間、一人當り年生産額、一機械當り所要勞働力等が比較され、コルホーズ

の問題にならぬ低能率は「經濟原則と人間性に背く農業制度」にとつて宿命的なものであり、「對農工政策の根本を變革せざる限り、その改善は甚だ望みなきものと推察せられる外はない」（『ソ聯農業の社會化』一二四頁）と結論されておる。

だがこの比較は、米ソ兩國農業の體制上の相異を一應問題としないとしても、なお甚だ不充分だといわねばならない。寧ろかかる勞働能率の差を生じた基盤について検討するならば、ソ連のホルホーズ農業の能率が家族勞作經營とするアメリカ農業に著しく劣つてゐることは、何もホルホーズ農業が本來低能率だと云うことを證明するものではなくて、ソ連ではホルホーズが社會主義大經營としての原則的優位を充分に發揮するための條件が未だ備わつてゐないことを示すものにすぎないことが明らかとなる。

ソ連のホルホーズは世界で最も大規模且つ機械化された經營だと云われるが、勞働者一人當りの耕地面積は三・五ヘクタール（一九三八年）でアメリカの一・五ヘクタール（一九二五—二九年平均）の三分の一以下であり、また勞働者一人當りの動力裝備量は〇・五八馬力（一九三七年）でアメリカの五・八馬力（一九三〇年）の十分の一にすぎず、その利用率を考慮してもアメリカの六分の一にしか當らない。このようにホルホーズにおける資本の有機的構成はアメリカの平均的な經營に較べてずっと低い。

更にアメリカでは畜産は農業生産高（一九三五年）の半分以上に達しているが、ソ連では四分の一にすぎないし、果樹や蔬菜の

栽培も極めて少い。このような遅れた農業構造こそ、ホルホーズの勞働がなお甚しい季節性を克服し得ず、年間の勞働日數や勞働日の密度がアメリカ農業に劣り、勞働可能人口の約二分の一を農村に残さざるを得ぬ最大の理由である。ヤスニー氏が「米國農業は家族的農場が壓倒的でありその多くは必らずしも高能率を誇り得るものではないが、それでも尙且つ戰前の比較に於て勞働者一人當り年生産額は、ソ連の約四倍半に達した（『前掲書』二六頁）と論じてゐるのは、これらの條件を考え合せなら至極當然のことを指摘してゐるにすぎない。またアメリカについてはかかる平均的な數字の背後にある農民の階層分化を看過するわけには行かないであらう。

五

最後に、これまでに述べたことをしめ括つておこう。

ここで取上げた三冊の書物はわが國におけるソ連農業研究の今日の水準を示す夫々に特色ある研究である。的場徳造氏の『ホルホーズの話』はホルホーズの經營組織と技術を具體的に解明し、古賀英正氏の『ソヴェート農業經濟論』は概説的なからソ連農業の主要問題を洩れなく取り上げ、また那須皓氏譯編の『ソ聯農業の社會化』は農業集團化の過程およびソフホーズの發展を豊富な資料によつて跡づけている點に、各々すぐれた特徴を持つてゐる。讀者はこれらの書物からソ連農業についての有益な知識と示唆を受けるであらう。

の場、古賀兩氏は客觀的な事實に基いてコルホーズの社會主義大經營としての優位を立證しようと試みていられるが、コルホーズの經濟的貨幣的側面の分析が殆どなされていないため、その説得力が若干弱められている。

『ソ聯農業の社會化』は、ラデヂンスキー氏の執筆された部分について云えば、農業の集團化が國民經濟的な觀點から把握されていないことに幾分の難はあるが、嚴に客觀的な態度によつて貰かれ、その分析はすぐれた具體性を持つてゐる。しかしヤスニー、ヴォリン兩氏の論文によつて那須皓氏の増補せられた部分では、ラデヂンスキー氏の場合と違つてソ連農業に對して極めて積極的な見解や批判が展開されているにもかかわらず、紙幅の關係が資料的裏づけは必ずしも嚴密ではない。殊に行論においてどこまでがヴォリン、ヤスニー兩氏のオリジナルな見解であるか判別し難い點は遺憾である。しかしなおこれから、われわれは今日のアメリカにおけるソ連農業研究者の代表的な見解をうかがうことが出来るであらう。ヴォリン、ヤスニー兩氏の場合には的場氏や古賀氏と違つて、資本主義と社會主義との體制的な差異を全く捨象してコルホーズの問題を論じられるため、その優れた分析や示唆に富む批判も社會主義經濟についての獨斷的理解の上に立つてゐることが少くない。かかる方法は將來の豫測において謬りを犯す危険が多いと思ふ。

ソ連農業の研究に當つては、常に社會主義經濟の獨自なメヘニズムと國民經濟における農業の地位を明確に意識しながら、問

題を取上げられることが望しい。既にみたように、農業の集團化や、コルホーズの大經營としての優位の問題にしても、かかる方法によらなければその全き意義は把握し難いであらう。

かかる意味からここで論評した三冊の書物の研究を補足するためには、コルホーズの社會主義大經營としての優位に關する理論的特徴を挙げ、コルホーズの會計ならびにその國民經濟的連關とが差常り明らかにされる必要がある。ソ連におけるコルホーズ農業の諸經驗は今次大戰後いわゆる人民民主主義革命を経過した東歐諸國、北鮮、中國等に取り入れられ、ソ連とは夫々に異なつた國民經濟ならびに農業の基盤において改めて吟味せられ、發展する見透しを持つてゐる。那須氏が譯者序文で提起しておられるわが國における「事（コルホーズ）引用者」の採否の問題は更により廣い規模において研究する必要と可能性が生じたと云ふことが出来る。

筆者は夫々の書物にあまりにも多くのことを望み、また誤解誤讀している點や論及しないでしまつた重要問題も少くないと思ふが、これらの點については著者各位の御諒恕を願うことにして、もはや妄評の筆をおくべき時であらう。

なお上記の三冊の書物以外に、ソ連農業についての各論的な研究資料として次の四冊の翻譯（吉岡氏のものはカストロフスキー坂井氏のはトルウブニコフの翻譯とみらるべきものである）が刊行されているが、これらについては改めて論評したいと思ふ。

M・A・グルヴィチ其他著、政治經濟研究所譯『ソヴェート土地法』上卷

吉岡金市著『ソ聯農業の機械化』資料社昭和二十四年六月刊

坂井砂治著『ソヴェート農家の實態』資料社昭和二十三年六月刊

S・V・シヨリツ著農林統計協會譯編『ソヴェート農業統計教程』

昭和二十五年一月刊

豫 告

『農業総合研究』第四卷第三號 (七月刊)
(通卷二四號)

食糧對策の經濟的環境……………	馬場啓之助
戰後各國の農地制度の變遷……………	東井金平
中國に於ける米作……………	大橋育英
米穀生産費調査の統計的分析……………	石橋幸雄
一農家の現金收支……………	渡邊信夫
佐々木家の「積歲簿」……………	早川孝太郎
・書評・山村經濟に關する……………	中村治兵衛
二、三の近刊書……………	中村治兵衛
＝農村だより＝……………	中村治兵衛
考ふる農民たち (二)……………	鎌形勳